2017 12/26

第3種郵便物認可

薬害って？ 被害者から学ぶ

国に授業要請 一部の中高で試行

差別体験・前向きさ 生徒に響く

サリドマイド、肝炎、HIV……。国内で繰り返されてきた薬害について学ぶ授業が、今年度から一部の中学や高校で始まっている。再発防止には若者に薬害の歴史を伝えることが欠かせないとして、被害者が長年、国に求めて実現した。社会のあり方を考えるきっかけにもなると期待されている。

11月、大阪府枚方市の府立牧野高校。体育館に集まった約360人の生徒たちの視線が一点に集まった。

「手が不自由な私がどうやってリンゴを切るのか見て下さい」

千葉県から訪れたサリドマイド薬害の被害者、増山ゆかりさん(54)が笑顔でまな板に向かう。増山さんの両手は極端に短く、指は左右に3本ずつ。その両手で包丁を持ち、まな板のリンゴを切っていく。生徒からはどよめきが起きた。

サリドマイドは睡眠薬として1957年に旧西ドイツで発売された。服用した妊婦から手足に障害のある子どもが生まれて販売中止になった。だが、国内では回収が遅れ、厚生労働省によると1958年から62年ごろにかけて約1千人の被害児が生まれたという。

増山さんは、幼いころに病院や養護施設で過ごし、家族とのふれあいが少なかったことを授業で紹介した。腕の障害を理由に差別されてきた半生を振り返り、「誰かを恨んでも何も変わらない。とにかく人として幸せになることだと思い続けてきた」と語った。

生徒の多くは、事前学習で初めて薬害の存在を知ったという。1年生の養父明音(あのん)さん(16)もその一人。増山さんの授業では、前向きな姿に心が動かされたという。「同世代では知らない人が多い。話を聞いた私たちが伝えていかないと」と話す。授業を企画した中内拓司教諭(23)は「基本的人権や消費者のあり方を学ぶ機会になった」と手応えを語る。

薬害の授業を巡っては、被害者らの要望を受け、2011年から厚労省が作成した専用教材が全国の中学校に配布されている。だが、教え方がわからない教師も多く、使われない例も少なくなかった。

そこで今年度から、他校の参考となるモデル授業の実施を厚労省が決定。年度内に大阪、兵庫、山梨、埼玉の計5校で行われ、来年度も続く見込みだ。厚労省医薬品副作用被害対策室の川瀬健太室長補佐は「授業によって、より着実に薬害を学ぶことができる。他の学校にも授業の取り組みを広げていきたい」と話す。

（野瀬輝彦）

高校1年生に薬害サリドマイドの被害について語る増山ゆかりさん（左）＝大阪府枚方市

「二度と起きない社会 考えて」

元中央社会保険医療協議会委員　勝村久司さん

私は陣痛促進剤の被害で長女を亡くし、医療情報の開示を求める活動をしてきた。被害者にとって、失われた家族の命や、薬害で受けた障害に意味を持たせる方法は一つ。同じ被害を繰り返さないようにすることだ。子どもたちには、薬害の被害者にも加害者にもなって欲しくない。そのために全国薬害被害者団体連絡協議会として薬害教育の実現を求めてきた。

授業を通じて学ぶことは多いと思う。被害者への偏見・差別を知り、人権問題を知る。情報公開の重要性を学ぶことで、民主主義のあり方を考えることにもつながるはずだ。薬害が二度と起きない社会をどうやって実現するかを考えるきっかけにしてもらいたい。

apital　朝日新聞の医療サイト・アピタルで、勝村久司さんのコラム「患者安全を求めて」が始まります。長年、患者目線で医療現場に提言してきた勝村さんが、安全に医療を受けるためのアドバイスをお届けします。